

平成20年度病害虫発生予察情報 特殊報 第1号

平成20年10月1日
岩手県病害虫防除所

アシグロハモグリバエの発生について

1 発生状況

- (1) 平成20年7月に一関市の施設きゅうり及び二戸市の露地きゅうりでハモグリバエによる被害が発生し、北海道立中央農業試験場に同定を依頼したところ、アシグロハモグリバエ (*Liriomyza huidobrensis*) であることが確認された。県内初確認である。
- (2) 県農業研究センター及び病害虫防除所でPCR法により検定した結果、東磐井郡藤沢町のトマト、ピーマン、トルコギキョウ、大船渡市の露地きゅうりでの発生を確認した。
- (3) 国内では、北海道、山口県、宮城県、青森県、広島県で発生が確認されている。

2 形態と生態

(1) 形態的特徴

- ・ 成虫の体長は2mm前後。体色は全体的に黒色で、背胸部の小楯板の黄色が目立つ(写真1)。
- ・ 老熟幼虫は体長3mm前後で、体色は乳白色。
- ・ 成虫の色彩は同属で広食性のナスハモグリバエ等と類似しており、正確な同定には雄成虫交尾器の形態かPCR法による確認が必要である。

(2) 生態

- ・ 成虫は葉中に産卵し、ふ化幼虫は葉に潜ったままトンネル状に葉肉を食害する(写真2)。
- ・ 葉脈沿いに食害が多くなる傾向がある。
- ・ 老熟幼虫は葉外に脱出し、土中(一部葉の表面)で蛹化する(写真3)。
- ・ 1世代の発育期間は25℃で16日、20℃で23日程度である。
- ・ 耐寒性は低く、寒冷地での野外越冬の可能性は低いと考えられている。

(3) 寄主植物*

広食性であり、国内では、ナス科(トマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、パプリカ、バレイショ、ペチュニア、イヌホオズキ)、ウリ科(カボチャ、キュウリ、マクワウリ)、キク科(レタス、ゴボウ、シュンギク、キク、アスター、プチアスター、マリーゴールド、ヒマワリ、ダリア、サイネリア、ガザニア、ソリダゴ、ヒメムカシヨモギ)、アブラナ科(チンゲンサイ、ハクサイ、非結球ハクサイ、キャベツ、ダイコン、カブ、ミズナ、ナバナ、オータムポエム)、セリ科(セルリー、エリンギウム、ブブレウルム)、ユリ科(ネギ)、アカザ科(ホウレンソウ、テンサイ、シロザ)、ナデシコ科(宿根カスミソウ、カーネーション、ナデシコ、サボナリア、ハコベ)、リンドウ科(トルコギキョウ)、キキョウ科(カンパニュラ)、アオイ科(シダルクア)、イソマツ科(スターチス)、アルストロメリア科(アルストロメリア)、ノウゼンハレン科(ナススタチウム)、フウチョウソウ科(クレオメ)、シソ科(ナギナタコウジュ)、ヒユ科(センニチコウ、ケイトウ、イヌビユ)、マメ科(インゲンマメ、ダイズ、アズキ)、スミレ科(パンジー)、ツルムラサキ科(ツルムラサキ)、キンボウゲ科(アネモネ)、サクラソウ科(プリムラ類)、クマツヅラ科(バーベナ)、ツユクサ科(ツユクサ) が寄主として確認されている。

※北海道、山口県、宮城県、青森県、広島県の資料をもとに作成。

3 防除対策

- 本種は寄主範囲が広いので、圃場内及び周辺の雑草を除去し、圃場衛生に努める。
- 本種は薬剤抵抗性が発達しているので、ハモグリバエ類を対象とした薬剤防除を実施しても被害が目立つ場合は、最寄りの農業改良普及センターか病虫害防除所に連絡する。
- ハモグリバエの被害の見られる苗は定植しない。
- ハウス栽培では、入り口や開口部にネット(目合い1mm以下)を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 被害残さは発生源となるため、圃場外へ持ち出し蒸し込み処分する。
- 密度低減のため、夏季のハウス内の蒸し込みが有効である。
- 冬季に作付けしないハウスではビニールを撤去するなど、越冬場所を作らないようにする。
- 薬剤防除ではチアトキサム剤、エマメクチン安息香酸塩乳剤、IGR系統、ネライストキシン系統の効果も期待できる。なお、農薬の使用にあたっては、対象作物に適用のあるものを使用すること。



写真1 成虫(矢印：小楯板)



写真2 被害葉



写真3 蛹

【利用上の注意】

- この情報は、平成20年9月24日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。
- 農薬は使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。

【情報のお問い合わせは病虫害防除所まで】

TEL 0197(68)4427

FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

アドレス <http://i-agri.net/agri/>

農薬使用の際には ①使用基準の遵守 ②飛散防止 ③防除実績の記帳 を徹底しましょう。